

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Conceptual processing in English-Japanese simultaneous interpreting

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ishizuka, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1479

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



[博士論文審査の概要]

本論文は、実際の英日同時通訳記録を分析し、通訳者が頭の中で原発話の進行と並行して展開していると考えられる概念化のプロセスを考察するものである。表示装置としては、概念的複合体(conceptual complex: CC)を構成要素とするCCモデルを基盤としている。主要な議論となっているのは、先行文脈あるいはその背景にある情報がどのように訳出に反映されるかについて、イベントとしてまとめられるCCの変遷を中心に、通訳者の理解を具体的にオンラインで提示することであり、その記述の妥当性について詳細な議論を展開している。その際に注目するのは起点発話(原発言者の表現)と目標発話(通訳者の表現)の差であり、従来は断片的にしか扱われなかった通訳者の特徴的な表現、つまり、追加やまとめ直しや非直訳的表現などの来源を明示化しようとする。

複雑で多面的な同時通訳プロセスの根幹部分に迫る新鮮で緻密な議論を展開する本論文は、同時通訳研究に新たな地平を拓くものであると共に人間の発話理解一般の分析に具体的な指標を提供するものであり、審査委員会としては本論文が学位申請論文として高く評価できるものと判断する。

[論文審査結果]

本論文は、第1部の理論的背景、第2部の事例研究、第3部のオンライン分析、および第4部の結論から構成される。

第1部には、セレスコビッチ(D. Seleskovitch)が提唱した脱言語化の考え方に関する議論(第2章)、CCモデルの概観(第3章)が含まれる。通訳者は入力となる原発言者の言語表現をまず捨て去れと唱えるセレスコビッチの考え方は通訳教育の面では意義深いと評価されるが、脱言語化されたメッセージとは具体的に何を指すのか、言語なしで頭の中でどのように処理できるのか、というような疑問も出されている。本論文では、CCを描くに際して自然言語の単語を使っており、概念化を表すためにやはり言語表現が必要であることを示しているようにも見えるが、CC表示で使われている単語そのものがその場の概念の輪郭を示すだけであり、イベント「構造」という非言語的な理解がCCで表されているとするならば、脱言語化の一面が具体的に表示されていると考えることもできる。その点で、CC記述を提示する本論文は脱言語化に関する論争を乗り越えるためのひとつの糸口を与えていると言えるであろう。

CCモデルの考え方についてはFunayama(2006)などをベースとして第3章でまとめられている。CCが非言語的側面に注目すること、話の流れに沿ってダイナミックに変容する性質をもっていること、入力言語表現だけではなく、文脈情報、背景知識などがCCの構築に取り込まれることなどが導入され、第2, 3部における具体的な議論を支える形になっている。

第2部以降では、実際の同時通訳記録に見られる現象に基づき、CCで表され得る概念化の実態を抽出している。たとえば、第4章では原発話におけるagreementという表現が

日本語通訳では「認識」と訳されたり「合意」と訳されたりする現象に注目し、周到的な議論を通してそのような現象を引き起こすメカニズムを考察している。第5章では、原発話の英語では特に使役構造が使われていないところに対訳の日本語では使役表現「させ」が出現していることに注目し、CCの展開を示しながらその現象を新しい視点から説明している。つまり、特定の訳出の必然性についてではなくその訳出が可能であること自体に注目し、その可能性が導かれる過程をCCの展開として明示化しようとする。

第3部においては、原発話14行に及ぶ部分について網羅的な議論を展開している。原発話の英語表現と訳出日本語表現のずれを「繰り返し」「背景情報の現れ」「指示表現のメタ表示の現れ」「内在的論理」「イベントCCの現れ」などに分類し多彩な通訳現象をCCの視点から考察している。いずれも、CC記述の枠組みを用いることによって説得力のある顕在化が可能になり、また、背景情報の現れや指示表現のメタ表示の現れなどを一体的に示すことができている。細部の議論を組み込むことも容易となり、たとえば、insinuationsという原発話の表現に対する「暗に秘めて批判されたり」という訳出に関して、語彙項目の選択だけではなく、受身の助動詞「され」の部分にも十分な注意が向けられている。このことも、通訳者によるイベントCCの保持によって説明される。こういう側面の説明を可能にする点にもイベントCCの有用性がよく表されている。

第4部の結論でまとめられているように、本論文はCCの記述を精緻化しながら、具体的な記述例を豊富に提供している。特にイベントCCについては、同時通訳の時間的流れの中で特定のイベントCCが保持され、内容が追加され、後続の訳出のベースとなる様が明示的に表されており、その点が高く評価できる。そのようなことを可能にする新しいタイプの通訳理論研究として本論文の意義は大きいと言える。また、通訳現象を分析の対象にしながらも人間の発話理解一般につながる所見が多々論じられ、発話そのもののメンタルな側面に光を投じる点でも高く評価できる。

[最終試験結果]

最終試験は、2013年2月7日午後1時30分から3時30分まで、103教室で実施され、船山仲他（主査）水野的（青山学院大学教授）山口治彦、三島篤志が審査にあたった。審査は公開で行われ、冒頭申請者から論文要旨の発表があり、録画資料の一部も公開された。

審査員から、同時通訳記録を解釈する視点、情報構造の扱い方、複数の通訳者からデータを集めることの必要性、言語間の等価性、今後の展開などについての質問が出され、幅広いテーマで充実した議論がなされる中で、申請者の考え方が一層明らかにされた。

公開審査終了後、各委員がそれぞれの見解と評価を述べ合い、意見交換の後、本論文が博士論文として十分な成果を示している点で合意が得られ、最終試験の評価を「合格」とすることで意見が一致した。